
世界史A

MICKEY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界史A

【Nコード】

N5372U

【作者名】

MICKKEY

【あらすじ】

高一の学習「世界史A」のテスト勉強用にご利用下さい。

※あくまでテスト勉強用なので、脚色してあります。

第1話「フランス革命」

アンシャン・レジーム・・・フランス革命以前の極端に不平等な政治・社会体制のこと

国王はブルボン王朝と呼ばれ、1589年から絶対王政は始まっていた。

身分のピラミッド上では、ブルボン王朝はピラミッドの更に上、ピラミッドの頂点には第1身分である「聖職者」。総人口の約0.4%だ。

更に続く第2身分は「貴族」。総人口の約1.6%。

そして最下層である第3身分は総人口の約98%を占めていた。そのうち、18%は市民、80%が農民とされ、市民は3種類に分かれていた。

第1・第2身分は「特権階級」とされ、「封建的特権」を持っていた。

身分によって世襲（身分が引き継がれること）している特権のことだ。

免税や領主裁判権など。

3種類の市民。まず富裕市民である上層ブルジョワジー・大商人。更に中流市民である商工業者や小商店主など。そして下層市民であるサン・キュロット。サン・キュロットとは、「半ズボンを持たない」という意味である。

また、農民の大部分は農奴と呼ばれる不自由な貧農だった。

一部の富裕な市民は、経済力を向上させて重い税を負担していたにも関わらず、「参政権」を認められないことに不満を抱いていた。

その理由としては、この頃に流行していた「啓蒙思想」が当てはまる。

「啓蒙思想」とは、自由・平等などの基本的人権や人民主権、権力分立などの考え方を説き、目覚めさせようとする思想である。

1780年代、フランスは財政難に陥っていた。

七年戦争の莫大な出費、アメリカ独立戦争への参戦。更には国王ルイ16世による豪奢な宮廷生活。

この危機にルイ16世は銀行家ネッケルを財務長官に起用。

ネッケルは財政難を乗り切るため、特権身分への課税を提案した。

つまり特権身分の持つ免税の特権を廃止すると言うことだ。

しかしそれでは特権身分が黙っていない。特に「貴族」は自らの特権を維持する為、国王に反抗。彼らは170余年も開かれたことのない身分制議会「三部会」召集を要求した。

この三部会の召集前に、第1身分出身のシェイエスがパンフレット「第3身分とは何か」を著し、それが第3身分の人々の権利主張の根拠となった。

1789年5月。ヴェルサイユ宮殿で三部会が開かれた。

第1身分、第2身分は自分たちの特権を維持する為、第3身分への課税を主張。

対する第3身分は発言権が弱い為、拡大を要求。

その結果、第3身分は自ら分離して「国民議会」を立ち上げた。

ネッケルが第3身分の議席数を倍増させたのも忘れてはならないことだ。

ルイ16世「はあ？下層のクズ共が国民議会？構わん構わん、潰せ。」

国王は議場を閉鎖し、第3身分への妨害を企てた。

しかし、ここで第3身分の人々の心に炎が宿るのである。

「例えこの身が尽きようとも・・・我がチームは解散しない！耐えるぞ、ミラボー！」

ミラボー「お、おう・・・。」

ミラボーのこの微妙な返事。それは、第3身分の人々の中でも「派の違いを表していた。

「共和派」と「立憲君主派」の2つの派。「共和派」の考えは「憲法を制定したら、国王は不必要」。「立憲君主派」の考えは「憲法制定は望むが、国王はそのままに」。

「立憲君主派」の人々は「自由主義貴族」と呼ばれ、主にブルジョワジーがここに属していた。ちなみに「共和派」には「穏健共和派」と「急進共和派」の2種類が存在し、主に中流市民が「穏健派」、サン・キュロットが「急進派」だった。

彼らは1789年6月、「テニスコート球戯場の誓い」を結ぶ。

国民議会は憲法制定までは弾圧を受けようとも、解散しないことを誓った。

国王は議会をやむなく承認。第1・第2身分も合流し、「憲法制定国民議会」が成立した。

ちなみに、第3身分の代表はブルジョワジーである。

だが・・・。

ルイ16世「あのクズ共め・・・！こうなれば軍隊を動かす！議会を黙らせろ！」

この頃、パリ市民は凶作による食糧不足に苦しんでいた。ネットケルが罷免されたこともあり、民衆の怒りは頂点に。

民衆は遂に政治犯を犯す。

1789年7月14日、バスティーユ牢獄襲撃事件。

「ブルボンの豚がああああ！ルイ16世、ホビロン！」

パリ市民2万人が弾薬目当てで、圧政の象徴とされたバスティーユ牢獄を襲撃。

約100人の死者を出し、パリ民衆は牢獄を占領した。

この事件はたちまち全国に広がり、各地で「農民暴動」が起こる。その結果、亡命貴族^{エミグレ}が出現し外国へ逃亡する。

このような「下からの動き」に国民議会は迅速に対応。

1789年8月4日「封建的特権の廃止」を決定する。

これによって、領主が農民に強制していた裁判権や労役など、身分上の特権を全て廃止。

島民は身分上の自由を得たが、領主に納める「地代」は有償廃止だった。（25年分の地を一括払いした時のみ廃止される）

そして、1789年8月26日「人権宣言」の採択。

これはバスティーユ牢獄の襲撃の成果を生かし、ラ・ファイエットが起草した。

アメリカ独立宣言との違いは、「所有権の不可侵」がある点だ。

代わりに、アメリカ独立宣言には「幸福の追求」が認められている。

1789年10月、ヴェルサイユ行進一（十月事件）

ルイ16世「おいお前、パリの女共がクレームをつけに来てるぞ。何？国民議会の2つの決定を承認しろ？食糧難だ？知らんがな。」

マリ・アントワネット「パンがないならケーキを食べれば良いじゃないのよ。」

ラ・ファイエット「結果・・・どうなるだろうか。」

そしてその結果、市民は国王一家をパリに連行。もちろん、国王の動きを市民が監視する為だ。国王一家は「テュイルリー宮」へ移された。

これと同時に、国民議会もパリへと移った。

それから1年半の月日が流れ・・・

1791年4月、ミラボー死去。

更に6月、「ヴァレンヌ逃亡事件」が起こる。

ルイ16世「お前の実家、オーストリアへ逃げるのだ！」

マリ・アントワネット「このヴァレンヌ村を越えれば・・・！」

「・・・？ありゃ国王一家だべ。」

「国王がオーストリアに逃げるぞ！捕えろ！」

その後、国王一家はパリへと連れ戻される。この事件により、国王への不信感が一気に高まる。

この頃、自由主義貴族と上層市民が主導権を握っていた。

彼らは諸改革を実施、無制限だった王権の制約を狙った。

- ・教会財産の没収
- ・ギルド制―（古い閉鎖的な組合制度）の廃止

そして1791年9月、遂に「1791年憲法」の制定。これが、フランス最初の憲法となった。

内容は「立憲君主政」「制限選挙」と言った物で、「立憲君主政」では絶対的な王権に対し、議会の優位を確立。「制限選挙」では一定の財産を持つ者が選挙権を持つというルールを決めた。

国民議会は当初の目的であった「憲法制定」を達成したので「解散」し、「制限選挙」で総選挙を実施した。

立法議会の招集―

君主制を支持する議員が当初は有力であったが、ヴァレンヌ逃亡事件などの影響で次第に「共和主義者―（共和派）」が有力になって行く。

1792年4月、ジロンド派が主導権を握る。

※特権階級が「王党派」、ブルジョワジーが「フイヤン派―（立憲君主派）」、中流市民が「ジロンド派―（穏健共和派）」、サン・キュロットが「ジャコバン派―（山岳派・急進共和派）」に属する。このジロンド派は上層市民中心だった。

この頃、ヨーロッパの強国であるオーストリアやプロイセンはルイ16世一家に身の危険があるならば、フランス政府に干渉する事を宣言し、軍隊を国境に進めていた。

その為、国外からの危機に備え対策が必要だったのだ。

「自由の十字軍」の提唱。

フランス革命の理念である自由を守るため、我々が戦い諸国にも「自由」の恩恵をもたらそう！という考え方だ。

つまりフランスだけでなく、他国にも自由を与えようものだった。

立法議會はオーストリアへの宣戦布告を決議し、オーストリア領ベルギーに侵攻を開始。

これが「革命戦争」（1792～1799）の始まりだった。

しかし、開戦当初は負け続き。それに対し国内に反革命勢力が復活し、国内の危機意識が高まる。

「ここで我々が終わって良いものか！？否！断じて否である！今こそ、立てよ！立てよ国民！祖国は危機にあり！」

ジロンド派の呼びかけに対し、全国から「義勇兵」（連盟兵）がパリに集結。

マルセイユ出身の連盟兵が「ラ・マルセイエーズ」という行進曲を作り、それが今ではフランス国歌となっている。

1792年8月「8月10日事件」

連盟兵とサン・キュロットがテュイルリー宮を襲撃し、国王を幽閉。

「王権停止」と「男性普通選挙の実施」を要求した。

結果、「王権停止」に成功した立法議會は自ら解散。史上初の男性

普通選挙—（21歳以上）を実現した。

1792年9月、「8月10日事件」から約1か月後に「国民公会」が招集された。

国民世論が選んだ答え。それは「共和派」だった。率いるは山岳派・ロベスピエール。

そしてこの月、「ヴァルミーの戦い」でフランス義勇軍がプロイセン軍に初勝利。

それが共和派の自信にも繋がった。

最初の決議で、議会は「王政を廃止し、共和政樹立を宣言」した。これは「第一共和政—（1782〜1804）」と呼ばれる制度であった。

その後、1793年1月に国王一家は断頭台で処刑された。

パリ民衆Ⅱサン・キュロットは、これまでに「バスティーユ牢獄襲撃」「ヴェルサイユ行進」「8月10日事件」において行動を起こした。

この後、更に活発な運動を展開する。

「自由よりも経済統制を」要求。食糧不足や穀物の値上がりを警戒したのだ。

「反革命派への処罰」で、亡命貴族や王党派の動きを警戒した。更にそれは「9月虐殺」へと発展する。

1792年9月、国民公会が招集された月のこと。パリ民衆は反革命容疑者を約1万5000人も虐殺した。

このサン・キュロットの動きが、国民公会の動向に大きな影響を及

ぼす。

1793年1月の国王処刑を機に、ヨーロッパ諸国は革命の広がりを阻止する為、フランスを攻撃。

「第1回対仏大同盟」結成。イギリスを中心にヨーロッパ諸国が結んだ軍事同盟だ。

更に王党派の反乱。

フランス国内外共に危機にさらされていた。

そんな中、国民公会は内部分裂・・・。

山岳派（ロベスピエールなど）VSジロンド派

そして1793年6月、パリ民衆は国民公会を包囲し、山岳派を支持。ジロンド派を追放した。

これにより、「山岳派の独裁」が成立してしまったのだ。結局、民衆の支持があればこそ「独裁」なのだろう。

ここから、フランス革命は最も過激な時期へと突入する。

1793年6月～1794年7月の1年1ヶ月間だ。

・封建的特権の無償廃止・・・遂に「地代」も無条件に廃止。農民たちは土地を捨て、多数の「小土地所有農民」が生まれる。

・最高価格令・・・生活必需品の物価統制。

更に「国民国家」の統制をはかる諸制度として、

- ・徴兵制
- ・革命暦
- ・メートル法

などが制定された。

1793年憲法―（通称ジャコバン憲法）制定・・・男性普通選挙の確率↓実施はされなかった。

そして「恐怖政治」の展開。

「公安委員会」に権限が集中され、革命裁判所と連携して反革命派を断頭台で処刑して行った。1年間に2万人を超す処刑者を出したこの委員会の委員長こそがロベスピエールなのである。

次第に、民衆はそんな山岳派から離反して行く・・・。
商工業者は経済統制に不満、土地を得た農民はそれ以上の進展を望んではない。

更に徴兵制に反発した「ヴァンデーの反乱」。

1794年7月、恐怖政治の終わりを告げる鐘が鳴る。

「テルミドールの反動」（テルミドール＝革命暦の「熱月」）

ロベスピエールら山岳派の指導者たちは逮捕され、断頭台にて処刑される。

ロベスピエール「本当の・・・自由を考えたのに・・・！」

金持ち達「アンタはやり過ぎた。」

その結果、山岳派独裁は終わり、政権は穏和な共和派へと再び戻る（＝反動）。

革命の成果を得たのは「有産市民」（ある程度の私有財産を持つ人々）だった。

1995年、「1995年憲法」制定。制限選挙が復活し、有産市民による政権の確立。制定後、国民公会は解散された。

「総裁政府」設立・・・2院制の議会と5人の総裁。独裁化は防止できるが決断力に乏しい政府が生まれた。

そんな中、王党派は再び君主制を目指して動き始める。

更に1796年には「バブーフの陰謀」により、社会平等を主張したクーデタが計画されるが失敗に終わる。

社会不安の中で、国民は「強力な軍事指導者」を待望・・・そして、彼が現れた。

「ナポレオン・ボナパルト」

ナポレオンの登場により、再び結ばれた「第2回対仏大同盟」。

1799年、「ブリュームル18日のクーデタ」で、ナポレオンは弱体な総裁政府を打倒した。

ここまでは、「フランス革命」なのである。

第2話「ナポレオン時代」

革命戦争の始まりは1792年だった。

立法議会のジロンド派の政権下で、フランスはオーストリアに宣戦した。

フランス政府は「自由の十字軍」の名の元にフランス国民を動員。

更にコルシカ島で生まれた「ナポレオン・ボナパルト」を司令官とする軍が、1796年「イタリア遠征」で「オーストリア」を撃破。第1回対仏大同盟を崩壊させたのだ。

1898〜1899年、次にナポレオンは「エジプト遠征」を決行。イギリスとインドとの貿易路を遮断し、イギリスに「経済的打撃」を与える為だ。

だがこの時、パリは第2回対仏大同盟によって危機にさらされていた。

ナポレオン「兵士らよ、このピラミッドの上から中国4000年の歴史が……。」

兵士「はい、お知らせです。ってか中国じゃねえよwww」

ナポレオン「どうした、兵士よ。」

兵士「パリがピンチです。」

ナポレオン「なぬっ!? よし、兵士らよ、パリへ戻るぞ!」

急いで帰国したナポレオンは「ブリュームル（霧月）18日のクーデタ」を執行し、総裁政府を打倒。

1799年に「統領政府」を樹立した。「統領政府」には3人の統領が設置され、彼は自ら第一統領に就任した。

1800年、ナポレオンは「フランス銀行」を設立し、財政整備などを行った。

更に1802年、再びオーストリア軍を撃破し、第2回対仏大同盟を崩壊させた。

この時、ナポレオンは「アミアンの条約」を締結し、イギリスとの和約に成功。

革命戦争中の一時的な平和を手に入れた。

1804年3月「ナポレオン法典」制定。

全文2281カ条。「法の下の平等」「所有権の絶対」「契約の自由」などをあらわした。

封建制廃止、自由・平等を保障し、近代民法典の基礎として、以後の世界に大きな影響を与える。

更に「ナポレオン法典」制定から2か月後の1804年5月。

国民投票の圧倒的な支持を得て、皇帝に即位。「ナポレオン1世」となる。

これにより、これまでの「第一共和政」は終わり、「第一帝政」となった。

周辺諸国は皇帝・ナポレオンに警戒心を強め、第3回対仏大同盟を

結成。革命戦争の引き金となってしまふ。

新しい「自由・平等」の思想を持って戦うフランス国民や、それを率いるナポレオンの姿は、古い身分制秩序の下にある諸国の人民にとって、「封建的圧政からの解放者」に見えたという。

ヨーロッパ各地でナポレオン軍に呼応した動きが起こり出す。

オランダ・スイスに「共和派」が新しい国家制度を導入↓共和国へオーストリア支配下の「イタリア」各地にも、人民が独立して共和国を形成した。

この頃のオーストリアは「ハプスブルク家」の下に強大な封建国家であった。

この頃、既に産業革命の進んだイギリスは、「海上覇権」を確立していた。

ナポレオンはイギリスの覇権を崩し、フランスの植民地帝国再建、フランス経済・貿易の振興を目指した。それが大規模な経済戦争へと進展するのである。

1805年10月、「トラファルガー海戦」

エジプト遠征でイギリスの貿易路を遮断しようとしたが成果がなかった為、今回はイギリス本土への上陸作戦を試みたのだ。

だがイギリス軍には「ネルソン」という最強の海軍将、戦いのプロがいた。

ネルソン率いる最強のイギリス海軍にフランス海軍は完敗。ナポレオンの本土上陸は失敗に終わり、イギリスは「海上封鎖」で優位に

立つ。

1805年12月、「アウステルリッツの戦い（三帝会戦）」
フランス軍はロシア・オーストリア連合軍を撃破、更にプロイセン軍をも破り、首都「ベルリン」を占領。これで大陸諸国をほぼ制圧したのだ。

1806年11月、「大陸封鎖令」（ベルリン勅令）を発布。
大陸諸国とイギリスの貿易が禁じ、イギリスに「経済的打撃」を与え、「フランスの市場拡大」を謀るものだった。
しかし、植民地を多く持つイギリスへの打撃は乏しく、逆に「大陸諸国を苦しめる」こととなる。

※立場の順

皇帝↓国王↓公爵↓侯爵↓伯爵↓子爵↓男爵

ナポレオンの大陸制覇の結果、オーストリア中心の962年（オットー1世が国王）以来の強大な封建的国家体制だった「神聖ローマ帝国」が解体。

更に「ライン同盟」もこの年に成立した。

1807年、「ワルシャワ大公国」成立。旧ロシア領からポーランド人が独立し作り上げた。

旧ブルボン王朝支配下の「スペイン」、旧王政下の「オランダ」な

どではナポレオンの兄弟が王位に就いた。

大陸封鎖令の影響で、イギリスへの「穀物輸出」が重要な財政収入源だったロシア・プロイセンなどの農業国は、かえって「経済混乱」を起こしてしまう。

更にフランス軍の駐留により、「増税」や「兵員」の調達を負担する事となり、人民の抵抗を招くことに。

これまで封建支配下にあった人民は、「ナショナリズム」の意識に覚醒し、「民族統一」や国民国家形成を求めるようになった。

そしてそれが、ナポレオンの支配に対する抵抗に繋がるのである。

ーナポレオン最初の挫折ー

「スペイン」の抵抗。1808年、ナポレオンの兄が王位に就いたスペインで、マドリッド市民が抵抗を開始した。ゲリラ戦を仕掛けた市民に対し、フランス軍は25万の兵を派遣したが鎮圧に失敗。だが犠牲者の数も半端ではなく、「5月3日の処刑」として、「ロマン主義」の画家「ゴヤ」の作品としてその光景が残っている。

「プロイセンの改革」

首相シュタイン・ハルデンベルクによって行われた。

「農奴解放」や軍事改革など「上からの改革」による近代化政策である。

更に哲学者「フイヒテ」の連続公演により、国民のナショナリズムが刺激された。

—ナポレオン転落の始まり—

1812年「モスクワ遠征」

大陸封鎖令に違反したロシアへの「制裁」の為、大軍を以て遠征をするナポレオン。

しかし、ロシアの厳しい寒さ「冬將軍」にやられ、パリに帰着した時には約5000の兵士しか残っていなかったという。

結果、ナポレオン軍の大敗。

更にこの「モスクワ遠征」失敗を機に、諸国民が一斉に反撃。

1813年10月「第4回対仏大同盟」結成。

プロイセン・ロシア・オーストリアなどが連合してフランスへと攻め入る。

「ライプチヒの戦い」でナポレオン軍は敗北、パリを占領されてしまう。

1814年4月、「ナポレオン退位」

戦いに敗れたナポレオンは皇帝を退位し、「エルバ島」へと流刑になった。

しかし翌年、1815年3月、パリに帰還し再び皇帝に即位。

ナポレオンの動きを感知したイギリス・プロイセン・ロシア・オーストリアは再び連合し、ナポレオン軍と対決する。

1815年6月「ワーテルローの戦い」

この戦いでナポレオンは再び惨敗。フランス軍の戦死者は膨大だった。

た。

その後、ナポレオンは南大西洋の孤島「セントヘレナ島」へと流刑にされ、そこで一生を終えたと言う。

エルバ島脱出から、ワーテルローの戦いで再び鎮圧されるまでの約3カ月の期間の事を、「ナポレオンの百日天下」と言う。

第3話「産業革命」

「産業革命」とは、18世紀後半に「イギリス」で始まり、19世紀末までに現在の主要工業国に広がった「産業技術上の変革」と、それに伴う、経済・社会生活全般に見られる大変革を言う。

その結果、「資本主義社会」が確率することになる。

「資本主義社会」とは私有財産制と自由競争の原理に基づいて理銃を追求する「資本家階級」と、賃金を受け取って労働力を提供する「労働者階級」が存在する社会のことだ。

16～17世紀のイギリスでは、「毛織物工業」が発展していた。これはイギリスの「伝統産業」で、順調に発展していた。※伝統産業には「熟練工」が存在する。

農村に「マニファクチュア（工場制手工業）」が普及し、新たな商人らが「利潤」を求めて「投資」、「資本」の蓄積が進んだ。

※資本（生産手段）＝資金・土地・工場・機械など

またマニファクチュアの特徴は「分業と協業」であった。

農村の地主層「ジェントリ」もまた利潤を追求し、放牧を目的として農民から土地を奪い囲い込んだ。

このことを「第1次囲い込み」と呼ぶ。

この「第1次囲い込み」を「トマス・モア」は「ユートピア」という本に著し「羊が人間を食う」と皮肉っている。

また二度の革命〔清教徒革命〕（ピューリタン革命）・名誉革命〕

が起こり、古い特権やギルド制が打破され、「自由」な生産・経済活動が認められた。

植民地獲得戦争に勝利したイギリスは、広大な「市場」を獲得。

「農業革命」の進展。

古い「三圃制」をやめて、「輪作（四輪作法・ノーフォーク農法）」が普及。

更に人口増加・戦争により「穀物」需要が増大。

その結果、今度は「穀物増産」の為に「第2次囲い込み」が行われた。

これにより、穀物性サインは発展したが、多数の農民が土地を失った。

この農民たちは新たな産業が必要とする「労働力の供給源」となっていたのである。

つまり、産業革命以前のイギリスには「資本の蓄積」「自由な経済活動」「豊富な労働力」など、新たな産業に必要な要素が存在していた。

「綿布」の需要拡大

元々は「インド」から手織り綿布を輸入していたイギリスだったが、アフリカでの「奴隷貿易」の為にイギリスの伝統的な毛織物にかわる貿易品となった。

その為には安価で大量に生産するための技術革新が必要。

時代が求めた時、世界は必ずアクションを起こす。そして、技術革新は始まるのである。

織布部門 1733年「ジョン・ケイ」が「飛び杼」を発明、生産効率は2倍へ。これにより、糸の増産も必要となる。

紡績部門 1764年「ハーグリーブズ」が「多軸紡績機（ジェニール紡績機）」を発明。しかしこの糸は細くて弱かった。

1768年「アークライト」が「水力紡績機」を発明、生産性が向上し、太くて丈夫な糸が出来る。

1779年「クロンプトン」が「ミュール紡績機」を発明。前出の二つの合体であり、細くて丈夫な理想の糸が作れるようになる。

動力部門 1769年「ワット」が「蒸気機関」を改良。「蒸気機関」の元々の発明者は「ニューコメン」。

織布部門 1785年「カートライト」が「力織機」を発明。動力に蒸気機関を取り入れ、飛び杼の3.5倍の生産性を発揮した。

1735年、「ダービー」がコークスを利用する製鉄（コークス溶鉄法）に成功。

蒸気機関の燃料として、木炭に変わり「石炭」の採掘が進む。

1793年「ホイットニー」が「綿繰機」を発明、綿花の種を取り除く作業効率は50倍UPした。

綿業都市「マンチェスター」

商港都市「リヴァプール」

製鉄業都市「バーミンガム」

これらは「賃金の安い」都市である。

旧来の労働力は「熟練工」や「農民」だったが、産業革命によって労働力は「女性」「児童」「移住労働者」などに変化した。賃金の安い労働力だ。

「移住労働者」のうち、特に「アイルランド人」は安価な労働力として利用された。

また工場労働により、女性は「労働と家庭生活の分離」からそれぞれの場面が一生に関わるようになった。

しかし、都市への急激な人口集中により「スラムの発生」「不衛生」「犯罪の温床」などの問題が発生。

更に「低賃金」「長時間労働」など労働問題も発生していた。

1807年、アメリカの「フルトン」が「蒸気船」を発明。

1814年には「スティーブソン」が蒸気機関車を改良。元々は「トレヴィシック」が1804年に発明したものである。

1830年にはリヴァプールとマンチェスター間に「鉄道」開通。
「交通革命」が始まる。

イギリスは「世界の工場」と呼ばれ、工業製品が世界を支配した。
これにより「世界の一体化」が始まるのだ。

第4話「ウィーン体制の始まり」

1814年9月、ナポレオンがエルバ等へ流刑にされてから5か月後。

「ウィーン会議」が開催された。この会議の目的は、ナポレオン戦争の事後処理と、混乱したヨーロッパの秩序回復だった。

トルコを除く全ヨーロッパ諸国が参加し、その主宰者はオーストリア外相（のちに首相）、「メッテルニヒ」。

更にはフランス外相「タレーラン」、ロシア皇帝「アレクサンドル1世」、プロイセン首相「ハルデンベルク」なども参加していた。

「会議は踊る、されど進まず」

諸国の利害関係の対立により、会議は進まなかった。

だがこの会議をリードしていたのは、なんと敗戦国であるフランスの「タレーラン」だった。

タレーラン「敗戦国には発言権さえ認められない、それが常識だろう。しかし！敗戦したのは我らブルボン王朝ではない、ナポレオン1世だ！フランスが敗れたのではない・・・ナポレオン・ボナパルトが敗れたのだ。」

巧みな外交手腕で、タレーランは会議の進行を手玉に取る。

そんな時だった。1815年3月、「ナポレオンがエルバ島を脱出」。

これにより諸国は調印を急ぐ。

タレーラン「「正統主義」の原則の下に、大国の“勢力均衡”を図る！」

「正統主義」とは、「アンシャン・レシーム」、つまり王権の復活。

そして「ワテルローの戦い」が行われた6月、「ウィーン議定書」が調印された。

・フランス、スペイン、ナポリには「ブルボン家」が復活。

・ロシアは「ワルシャワ大公国」を解体した「ポーランド王国」を支配下に置く。

・オーストリアは「ヴェネツィア」を獲得。

・オランダは王国となり、オーストリアから「ベルギー」を割譲される。

・イギリスは旧オランダ領の「セイロン島」「ケープ植民地」を獲得。

・プロイセンはポーランドを放棄する代わりに、「ラインラント」を獲得。

・「スイス」は永世中立国となる。

・「ドイツ連邦」の成立↓ライン同盟を解体。

この「ドイツ連邦」は「オーストリア」「プロイセン」の二大国を含む、35君主国と4自由市から成る。

1815年から1848年まで続いたこの体制を、「ウィーン体制」と呼ぶ。

その特色としては、大国の君主中心の「保守反動的」な支配体制。大国（列強）は正統主義による秩序維持や、大国間の勢力均衡をは

かる国際政治を展開した。

1815年「神聖同盟」

ロシア皇帝「アレクサンドル1世」が提唱した同盟。キリスト教の友愛の精神に基づき、平和を維持しようと言うものだ。

「イギリス」「トルコ」「ローマ教皇」を除く、全ヨーロッパ諸国が参加。

カッスルレー「友愛の精神？フン、武力で革命を起こして来た時代の延長戦にいる私たちだ……。言葉や理念だけで平和を維持しようなど！ナンセンスだな！」

これに対し、イギリス外相「カッスルレー」は「四国同盟」を提唱。イギリス、プロイセン、ロシア、オーストリアが参加した。

1818年にはイギリスが加盟し、「五国同盟」となる。武力によって体制の秩序を守ると言う、「軍事同盟」だ。

ロシア支配下の「ポーランド」、オーストリア帝国支配下の「チェコ」「ハンガリー」、分断された状態の「イタリア」、そして「ドイツ連邦」では政治や経済の統一が実現しないまま。

この様な中で、自由主義やナショナリズムを要求する動きが始まったのである。

—新たな革命の波—

1815年「ブルシェンシャフトの運動」

ドイツ学生同盟という大学生の団体が起こした運動である。

1817年「ルター宗教改革300周年記念」に大規模なデモ行進と、「ヴァルトブルクの森」で集会。

目的は「ドイツの自由と統一、憲法制定を求める」為だった。

1819年「カールスバートの決議」

メッテルニヒが決議したこれにより、様々な弾圧が行われた。

またこの年、イタリアでは「カルボナリ」が動いた。「カルボナリ」は「炭焼き党」の意味である。

立憲自由主義運動の秘密結社。

1820年「ナポリ」にて憲法制定を求めて蜂起。これはオーストリア軍が干渉し、徹底弾圧された。

また「スペイン立憲革命」も起こり、一時的に「自由主義憲法復活」に成功した。

しかし、1823年には「神聖同盟」による干渉で、フランス軍がマドリードを占領。徹底弾圧された。

1825年「デカブリストの乱」

ロシア青年貴族士官の組織が蜂起した。この日は、「皇帝ニコライ1世」の即位当日であったと言う。

また、1820年代にラテンアメリカで諸国が相次いで独立し、オスマン帝国支配下のバルカン半島で起こった「ギリシア独立戦争」

は、ヨーロッパで多くの関心を集めたという。

第5話「ウィーン体制の動揺」

1820年代、ウィーン体制を動揺させる二つの出来事が起こる。

1820年代の「ラテンアメリカ」諸国のスペイン・ポルトガルからの独立。

また21～29年に起こった「ギリシア独立戦争」。

この二つの成果はヨーロッパの革命運動を刺激し、フランス七月革命へと繋がっていく。

ウィーン会議により、フランスにもブルボン朝が復活。「立憲君主政」の政治が行われた。

国王は「ルイ18世」、次いで「シャルル10世」。どちらもルイ16世の弟である。

彼らは「貴族政治」を復活させ、「制限選挙」を行った。エミグレ亡命貴族への補償金を支払うなど貴族を優遇した。

更に1818年には「五国同盟」に参加。国民の不満を逸らすため、1830年7月には「アルジェリア出兵」を行い、これが植民地化の始まりだった。

だが民衆の不満が消えることはなく、アルジェリア出兵と同月、「フランス七月革命」が起こる。

国王による議会の未招集などが原因だったのだ。

「パリ市民」は例のごとく武装蜂起。7月27～29日を光栄ある三日間とし、市街戦を繰り広げた。

ロマン主義の画家「ドラクロワ」は7月28日…「民衆を導く自由

（の女神）」を描いた。

上層市民らは「自由主義改革」の必要性を主張。これにより国王シヤルル10世はイギリスに亡命した。

その代わりに新国王として、自由主義者で知られるオルレアン家の「ルイ・フィリップ」が現れる。

そして「七月王政」が成立するのであった。（1830～48年）

七月王政の特色は、制限選挙による「立憲君主政」。結局、「銀行家」などの有産市民中心の金権政治に過ぎなかった。

――一方その頃（1830年）――

ベルギー「独立するあるよ。」

1830年、ウィーン会議でオランダ領にされていた「ベルギー」の独立宣言。

これは翌年1831年の「ロンドン会議」で承認され、立憲君主国となった。

またイタリアでは再び「カルボナリの乱」が発生。オーストリア軍により鎮圧される。

また1830年には「ポーランド」の独立運動も「ワルシャワ」にて始まり、ロシア軍による激しい弾圧が行われた。

この時、ポーランドの「ショパン」（ピアノの詩人）じゃ「革命」を作曲したという。

イギリスでは1830年に最初の鉄道が開通。フランス七月革命の

影響で、「フランス」など他のヨーロッパ諸国にも産業革命が始まった。

1711～17年頃から、労働運動は始まった。この頃起きた「ラッダイト運動」。職を失った熟練工による機械破壊活動だ。

その後、イギリスで世界初の労働者による組織的な政治活動「チャーチスト運動」が起こり、1838年には「人民憲章」が発表された。

これは労働者による6か条の要求で、「普通選挙」などが求められた。

「署名活動」による議会への請願活動が中心となり、1848年に最高潮を迎えるが、以後は沈静化した。

この頃、ヨーロッパ諸国は「資本主義」が基本であった。資本主義の社会とは、「私有財産制」と「自由競争」の原理に基づいて利潤を追求する社会である。

「資本家階級」と、「賃金」を受け取って労働力を提供する「労働者階級」が存在する社会でもある。

では資本主義の弊害とは何か？

それは資本家階級の「無秩序」な自由競争である。これにより労働者は劣悪な条件を押し付けられた。

更に「分配の不公平」。資本家階級と労働者階級の間には貧富の差が増大したのだった。

スラムの発生、低賃金長時間労働、女性や児童の酷使など、社会・労働問題が発生した。

以上の理由から、資本主義への批判が生まれる。

「社会主義思想」の登場。社会主義とは、生産手段（工場・機械等）を「共有」にし、収益を「公平に分配」することによって「平等な社会」を実現しようという考え方だ。

人間の理性や善意によって平等な理想社会を実現できるとする考え方。

それをドイツ人「エンゲルス」はこう呼んだ。「空想的社会主義」と。

この空想的社会主義の例は以下の通りである。

イギリス人「オーウェン」が「ニューラナーク工場」で労働環境改善を実施。「工場法」（1833年）制定などに尽力。

オーウェン「可哀想だ・・・。」

フランス人「サン・シモン」が財産の不平等や貧困は「社会悪」とし、資本家と労働者両方の利益と福祉を主張。

サン・シモン「片方だけじゃダメなんだ。みんなが利益を得てこそ理想社会だ。」

同じくフランス人「ブルードン」は国家権力を否定する「無政府主義者」（アナキスト）で、「無政府主義」（アナキズム）を主張した。

ブルードン「国家権力などに惑わされるな！我々は平等な社会を作るんだ！」

これらが空想的社会主義の例である。

エンゲルス「目の前の人間を救いたいという欲求・・・そんな魂の・・・神側の声もある・・・だが、その声はあまりにもか細く小さいので、通常はごくあっさり・・・消し飛ぶっ！」

「科学的社会主義」。それがエンゲルスの親友、ドイツ人「マルクス」が著した「資本論」において科学的に分析された資本主義社会の在り様。

更に2人は1848年、共著で「共産党宣言」を発表。その中で2人は「すべての歴史は“階級闘争”の歴史である」「万国の労働者よ、団結せよ」と著している。

第6話「諸民族の春」

七月革命により成立した七月王政。銀行家（金融資本家）中心の金権政治を行うルイ・フィリップ。

その頃、「産業革命」の本格的な進展により、「産業資本家」が誕生。

資本家階級が成長し、「参政権」の拡大を要求。労働者階級には社会主義思想が広がった。

1848年「フランス二月革命」。

その直接のきっかけは、「選挙法改正」を要求する集会を政府が弾圧したことだった。

これも七月革命と同じく、「パリ市民」が蜂起。再び激しい市街戦を繰り広げた。

これにより国王ルイ・フィリップはイギリスに亡命、七月王政は崩壊し「第二共和政」が樹立された。

こうしてヨーロッパ各地に自由主義・ナショナリズム運動が盛り上がり、「諸民族の春」（諸国民の春）が始まる。

第二共和政（1848～52年）の展開で、「臨時政府」が成立。

臨時政府には、資本家階級を代表する共和派「臨時首相ラマルティエール」らと、労働者階級を代表する社会主義者「ルイ・ブラン」らが居た。

臨時政府は、自由主義的改革として「男性普通選挙」の実現、社会主義的改革として「国立作業場」の設置など、様々な政策を進めた。

また、4月には「総選挙」（四月普通選挙）を実施。普通選挙で国民の初めての意思表示が行われた。

結果、社会主義者は「惨敗」。フランスに多い「中小農民」が社会主義政策の進行により「土地」（私有財産）を失うことを恐れたためだ。

5月に国立作業場は閉鎖。失業者は激増する。

6月には「パリ労働者の六月蜂起」が起こり、政府軍により鎮圧された。

これにより、資本家階級と労働者階級の対立が表面化した。

―諸民族の春―

1848年、フランス二月革命の影響は七月革命を遙かに上回り、ヨーロッパ各地で「自由主義」・ナショナリズム、および「社会主義」を掲げる革命運動が高まる。

これを「諸民族の春」と呼ぶ。これによりウィーン体制は完全に崩壊する。

ドイツ「三月革命」。オーストリアの首都「ウィーン」で市民の武装蜂起。

その結果、「メッテルニヒ」が亡命。

更には「ハンガリー」で「アジア系マジャール人」が指導者「コシユート」自治を求め民族運動を起こす。

しかし結果はロシア軍の支援を受けた帝国軍に敗れた。

「ベーメン」（現在のチェコ）では「スラヴ系チェック人」が都市「プラハ」で「スラヴ民族会議」を開催。民族の同権を主張したが、オーストリア帝国軍により鎮圧された。

プロイセンでも首都「ベルリン」で暴動が起き（ベルリン三月革命）、5月に「フランクフルト国民議会」が開催された。

目的は全ドイツの統一と憲法制定で、統一方法をめぐり「小ドイツ主義」と「大ドイツ主義」が対立。

小ドイツ主義は「プロイセン」中心、大ドイツ主義は「オーストリア」中心に統一しようという考え方で、結果的には小ドイツ主義が勝利し、プロイセン王をドイツ皇帝とすることが決定。

しかしプロイセン王の拒否により、ドイツ統一は実現せず、議会は解散した。

「ポーランド」でも民族運動が起こったが、ロシア軍により鎮圧。ウィーン体制崩壊後、ロシアはオーストリアに代わるヨーロッパ最大の「保守反動国家」として「ヨーロッパの憲兵」と呼ばれるようになる。

また「イタリア」各地でも民族運動が起こり、革命家「マッツィーニ」率いる革命結社「青年イタリア」は蜂起、一時的に「ローマ共和国」が樹立された。しかしこれはオーストリア軍やフランス軍に鎮圧される。

イギリスではチャーチスト運動が最後の盛り上がりを見せ、「アイフルランド」での武装蜂起が起こる。

原因は「ジャガイモ飢饉」だった。

1848年の後半になると、フランスで「六月暴動」が起きる。こ

れで新たに「社会主義」の動きが台頭。
すると「革命の急進化」を恐れる自由主義者たちが急速に「保守化」。

更に「ハンガリー」では自治政府発足と共に「少数民族」の権利を無視。新たな「民族対立」の表面化が起こる。

このようなことから、各国政府は「労働者階級と資本家階級の対立」や「複雑な民族対立」を利用して勢力を巻き返し、「1848年の革命は失敗」に終わった。

そして1848年、諸民族の春の意義とは何だったのか？

ー「ナショナリズム」の著しい発展ー

民族の「自由と独立」を求める動き・・・例…ハンガリー、ベーメン、ポーランドなど

民族の「統一」を求める動き・・・例…フランクフルト国民議会、イタリア各地など

これらナショナリズムの精神は拡大するにつれ、同時に新たな「民族対立」を生むこととなる。

ー新たな「階級対立」の表面化ー

資本家階級「ブルジョワジー」と労働者階級「プロレタリアート」の対立。

労働運動など、労働者階級の成長による革命の急進化を恐れた資本家階級は「保守化」。

以後は「上からの力」に頼り、改革の主導権を労働者に奪われないようにした。

また1848年にはアメリカで「ゴールド・ラッシュ」が起き、世界的な資本輸出・労働力の移動が発生。

世界の一体化が進み、資本主義は「帝国主義」へと向かう。

第7話「西ヨーロッパ」

1848年の諸改革は挫折に終わった。

しかし、その後は各国の君主・政府の指導のもとに、近代国家としての諸制度が整い、19世紀後半にはそれぞれの国が「国民国家」形成へと向かう。

19世紀後半のヨーロッパでは、中央集権的な「官僚」機構、鉄道・運河などの「交通網」整備、全国的な郵便制度、「公教育」導入など、共通の諸制度で人々を統合した。

これが、ひとつの「国民」という意識を形成、同時に「議会」制度の整備が進み、国民として「政治参加」することが可能になった。

更に各国政府は殖産興業に努め、世界的な「資本主義体制」（私有財産制・自由競争・利潤の追求・階級対立など）の形成、それにより各国は「植民地」の拡大を図った。

この植民地の位置づけは、西ヨーロッパ諸国にとっての「商品市場」（買わなイカ?）、工場などに必要な「原料供給地」（売ってくれなイカ?）というもので、この為に植民地支配をすることを「帝国主義」という。

つまり19世紀後半の西ヨーロッパは、世界進出により「新たな帝国」形成の過程を刻む時期だったのだ。

ーイギリスの繁栄ー

この時期、イギリスでは「ヴィクトリア朝」が繁栄していた。

女王の名は「ヴィクトリア女王」。そのままである。

ヴィクトリア女王は18歳で即位し、64年間ウィンザー朝（ハノーヴァー朝）を治世した。

経済的繁栄と国際平和の実現を目指す「パックス・ブリタニカ」。
19世紀前半、イギリスは「世界の工場」と呼ばれていたが、工業生産力でアメリカ・ドイツに追い越され、19世紀後半にはイギリスは「世界の銀行」と呼ばれるようになったのだった。

自由貿易の実現、交通革命の進展により、「貿易」・「運輸」・「情報」・「金融」などの諸分野においてイギリスは世界の中心になるのだ。

「情報」の分野では「海底ケーブル」による最新情報の取得、「金融」ではロンドン旧市街「シテイ」には多数の銀行や証券取引所が現れる。

1851年に海底ケーブルが敷設されて以来、これは「パックス・ブリタニカ」を支える土台となった。

一「選挙法改正」と労働者の運動一

選挙法改正前、有権者は全人口の3.8%に過ぎなかった。

1832年

ヤミニ

、第1回選挙法改正により産業資本家に選挙権が与えられ、有権者は5.9%に。

これで選挙権を得られなかった労働者階級は「チャーチスト運動」を展開。さらに「職業別組合」を結成して政治・経済的な制かも獲得した。

1867年

ヤムナク

、第2回選挙法改正。「都市」労働者にも選挙権が与えられ、有権者は14・5%に。

続く1884年

ハヤシたて

、第3回選挙法改正が行われ、「農村・鉱山」労働者にも選挙権が与えられた。

これで有権者は29・3%まで増加。

1918年

クイハないのか

、第4回選挙法改正で男性普通選挙、女性の一部も選挙権を得て、有権者は74・8%に。

1928年

クツウハないのか

、第5回選挙法改正で21歳以上男女普通選挙がついに実施され、現代とほぼ変わらない状況に。これで有権者数は95・5%にまで上昇した。

またチャーチスト運動や職業別組合などにより、「議会政治」の進展、「自由党」と「保守党」による議会政治が実現した。

自由党…旧名「ホイッグ党」・支持層「産業資本家」・内政「自由主義改革・アイルランド問題」・外交「植民地に自治を」・政治家

「グラッドストーン」

自由党の主な政策↓1870年「初等教育法」制定。1884年「第3回選挙法改正」。更に「アイルランド問題」に取り組む。

産業資本家の大儲けk t k rな状況を支持したので、産業資本家「ホップ♪ステップ♪ジャンピング♪ホッピング・オン！」な状況と合わせて「ホイッグ党」と覚える。

保守党…旧名「トーリー党」・支持層「地主階級・貴族」・内政「伝統的秩序を重視」・外交「植民地の拡大」・政治家「ディズレーリ」

保守党の主な政策↓1875年「スエズ運河株」買収。1877年「インド帝国」成立、このインド帝国の初代皇帝は例の「ヴィクトリア女王」であった。

貴族たちは王への服従こそ至高という考えだったので「王のおっしゃるトーリー」で「トーリー党」と覚える。

※イギリスの場合、1911年の議会法により、「下院」が優越する。

イギリスは「優越的な地位」を維持し、更に「工業化」を推し進める為に、植民地政策を転換させた。

まず「自治領」を設置し、「白人移住者」が開拓した植民地には「自治権」を与えた。

自治領は全部で5つ。「カナダ」・「オーストラリア」・「ニュー

「ファンドランド」・「ニュージーランド」・「南アフリカ連邦」(現・南アフリカ共和国)。

更に「インド」の支配を強化。

1757年、イギリスの「東インド会社」は「プラッシーの戦い」でフランス軍を破り、インド支配を進める。

インドをイギリスの「市場」とし、インド農民から「徴税」。「輸出の商品作物」※を生産させる。

※砂糖・茶・アヘンなど。

これは「インドの伝統産業の破壊」に繋がり、「インド大反乱」を引き起こす。

東インド会社が雇っていたインド人「傭兵」(シパーヒー)の反抗をきっかけに、ヒンドゥー教徒、イスラーム教徒の反乱が拡大。

イギリスが銃の薬包に、牛と豚の脂を塗ったのが原因だった。

ヒンドゥー教徒は牛を神聖な動物として崇め、イスラーム教徒は豚を汚らしい動物としていたのだ。

この反乱により、「東インド会社」は解散、イギリス政府はインドを「直轄植民地」とし、1877年「インド帝国」が成立する。

イギリス経済にとって「最大の商品市場」となった。

インド支配をより堅固とする為に、イギリス軍は「クアラルンプール」まで侵略!侵略!侵略!侵略!イカ(ryを重ねる。

アフガニスタン戦争・ミャンマー戦争、一方で「マレーシア」領有を確実にする。

「マレーシア」は「すず・ゴム」などの原料供給地である。

更に「中国」を「非公式の帝国」とし、植民地ではないがイギリス

政府の影響下においた。

1840年「アヘン戦争」、この時「香港」獲得。

1856年「アロー戦争」、欧米列強により中国の「半植民地化」が進む。

更に1853年の「クリミア戦争」で「オスマン帝国」に味方し、「スエズ運河」と「エジプト」に進出した。

自由党が取り組んでいた「アイルランド問題」はイギリス内政上の「ノドに刺さった骨」と言われていた。

アイルランドには「ケルト」系民族・「カトリック」信仰があり、イギリスの「ゲルマン」系民族・「プロテスタント」信仰とは相対していた。

イギリス政府はアイルランドの土地を奪い、イギリス人に売却。イギリス人は「不在地主」となりアイルランド人を「小作人」としていた。

しかし1845年に「ジャガイモ飢饉」が起こり、100万人は「アメリカ移民」となった。

一方フランスでは—1

1848年、二月革命で「第二共和政」成立、その後「ルイ・ナポレオン」が「大統領」に当選。

1851年にクーデターを起こして「独裁化」、更に1852年に国民の圧倒的ツ！支持のもと、皇帝に即位し「ナポレオン3世」となる。

これにより、この年から「第二帝政」が始まるのだ。

フランスは「レセプス」の資金集めにより、「スエズ運河建設」が始まり、1869年に完成した。

しかし6年後の1875年に「イギリス」主導になってしまう。

これによりブルジョワジーからの支持、更に「農民層」の生活向上で全国民の75%である農民層からの支持、また「公共事業」（例：パリ大改造）による失業対策により労働者階級からも支持を受け、結果どの階層からも「人気と支持」を獲得する。

更には万国博覧会で「国威発揚」、「ナショナリズムの高揚」を狙った。

このような人気と支持を維持するためには、内外に積極的な政策を続けなければならなかった。

1853年「クリミア戦争」。これにイギリスと共に参加したフランスは、エジプト方面を確保。

「スエズ運河」を建設した。

また1856年「アロー戦争」で中国市場にも進出。

1859年の「イタリア統一戦争」では「サヴォイア、ニース」の領土を得る。イタリア対オーストリア戦で、フランスはイタリアに味方する。

1862年には「インドシナ侵略」を開始、「インドシナ半島」の「メコンデルタ」穀倉地帯を得た。

1861年には「メキシコ出兵」をするが、これが大失敗。これを機に国民の信頼を失う。

1870年「プロイセン・フランス戦争」（普仏戦争）に大敗北。これによりナポレオン3世は退位した。

ナポレオン3世の退位により、「第三共和政」が樹立。臨時政府のリーダーには「ティエール」が選ばれる。

1871年にヴェルサイユはプロイセン軍に占領され、フランスにとって屈辱的な講和条約「ヴェルサイユ仮講和条約」を締結。鉄鉱石の産地「アルザス・ロレーヌ」地方を割譲させられた。

講和条約の内容に憤激したパリ民衆は政府に抗議、「パリ・コミューン」が成立した。

パリ民衆はなんと「自治政府」の成立宣言をし、これは史上最初の「労働者による政権」であった。

彼らは「社会主義」的な諸改革を実施するが、臨時政府軍はドイツ軍の支援を得てパリを攻撃。

「血の一週間」と呼ばれる虐殺が起こった。これにより、コミューンはわずか2か月余りで崩壊した。

1875年「第三共和憲法成立」。

ドイツは賠償金としてフランス国民から金を徴収していたので、政情が不安定になり、フランス国民の間に「ドイツへの復讐心（憎悪）」が次第に高まっていく。

第8話「アメリカ合衆国の発展と南北戦争」

アメリカ合衆国は1783年、パリ条約により「ミシシッピ以東のルイジアナ」を手に入れる。この時の大統領は「ジェファソン」。更に20年後の1803年には「ルイジアナ」（ミシシッピ以西）をフランスから買収し、領土を倍増させた。

1812年、「米英戦争」が起こるも勝敗は決せず。しかしこの戦いで合衆国は「経済的自立」を達成。第2次独立戦争とも言われる。1819年、「フロリダ」をスペインから買収。「モンロー」大統領が1823年に「モンロー宣言」を出し、ヨーロッパ諸国との「相互不干渉」を主張。孤立主義とも言われる姿勢であった。

「テキサス」は1836年に独立、45年に合衆国領に。

更には1846年「オレゴン」を併合、イギリスとの領土国境は「北緯49度線」に決定する。

1848年、「米墨戦争」により「メキシコ」と交戦。合衆国は圧勝し、「カリフォルニア」を獲得。

カリフォルニアにデイズニーランドがあるのは「米墨戦争」のおかげじゃないか？

これにより合衆国の領土は大西洋岸から「太平洋岸」にまで到達した。

更にこの年、カリフォルニアで金鉱が見つかり、「ゴールド・ラッシュ」が起こる！

イイネ！ビッグサンダー・マウンテンだね！西部の人口は急増した。

19世紀の合衆国の歴史は「西部開拓」時代。

東部やヨーロッパからの「移民」は、自分の「実力」だけを頼みに「フロンティア」を開拓していった。

彼らは先住民や環境との戦いの中で、「自主・自立の精神」、フロンティア・スピリッツを育んで行ったのだ。

フロンティアが西に移動していくことを「西漸運動」という。

開拓された場所は広大な「農耕地帯」となり、更に開拓による人口増加で東部の工業にとって豊かな「国内市場」が形成された。

西部出身の最初の大統領「ジャクソン」は、「民主主義」を進展させ「ジャクソニアン・デモクラシー」を巻き起こした。

1830年、「インディアン」はミシシッピ川以西の「不毛な保留地」へ強制移住させられ、抵抗する先住民たちは合衆国軍と熾烈な戦いを繰り広げ、「人口激減」となってしまった。

その後、合衆国は南北に分かれることとなる。

北部は「商工業」が中心、「関税」で外国から安い商品が入ってくるのを防ぐ「保護貿易」を主張。

政府による中央集権的政策⇨連邦主義の「共和党」が中心の政党。奴隷制には反対の「自由州」。

南部は黒人奴隷を使用する「プランテーション」を経営。原材料を輸出し、安価な工業製品を輸入する為「自由貿易」を主張。州ごとの独自の政策⇨集権主義の「民主党」が中心の政党。奴隷制には賛成の「奴隷州」。

「西部」への開拓が進むにつれて、「新しい州」をめぐり南北対立が激化。

そんな中、奴隸制反対運動が幕を開ける。

1852年「アンクル・トムの小屋」。「ストウ夫人」が著した物語だ。

奴隸制反対を訴えかける物語となっている。

1854年に「共和党」が結成。1860年には「リンカン」が大統領に当選する。

これを機に南部はアメリカ合衆国から離脱、「アメリカ連合国」に。

1861年から1865年、「南北戦争」。南軍が「サムター要塞」を襲撃したことにより開戦した。

初期は南軍の士気が高く、「リー將軍」のもとに優勢であった。

しかし、リンカンが打開策を生み出す。

1862年「ホームステッド法」（自営農地法）。未開拓の地で5年働けば、その土地を無償で得られるというものだ。

これにより「西部農民」はもちろん北部を支持。これで拍者のかかったリンカン率いる北部は1863年「奴隸解放宣言」を発表。

これにより「内外世論」の支持を獲得し、同年の「ゲティスバーグの戦い」で南部に勝利。

翌1864年には北軍は「グラント」を総司令官に任命（後に大統領に）。

1865年、南部の拠点「リッチモンド」を陥落し、北部は南北戦争に勝利する。

その結果、「合衆国の再統一」が行われた。

リンカン「フーハッハッハッハッハ！人民の人民による人民のための政治が勝利したのだ！」

とか何とか調子こいてたリンカンは「南北戦争」終結の5日後に暗殺されたという。

まさに「時の人」だったのだろうか。

この「南北戦争」は「the Civil War」（内乱）と呼ばれる。

1867年「再建法」。だがこれは1年しか続かず、終了後は黒人の権限が削減される。

また「合衆国憲法修正第13条」により奴隷制度は全面廃止されたが、黒人は土地をもらえず、結局は「シェアクロッパー」（分益小作人）となり、貧しい生活を送った。

このように、解放されても黒人への「法的社会的な差別」は解決されないままだったのだ。

例の「ホームステッド法」の影響で、西部は世界一の「大農場」に発展。更には1867年に「アラスカ」をロシアから購入。

1869年には「大陸横断鉄道」開通、これにより東部の「工業」生産力と、西部の「農業」生産力と「国内市場」が結合した。

1880年代には工業生産・小麦生産量ともに世界一。1876年「ベル」は電話を発明。1879年には「エディソン」が電灯を発明するなど、時代が進んで行った。

1890年代、「フロンティアの消滅」。

このような合衆国の繁栄を支えたのは、「移民」の流入だった。

ジャガイモ飢饉による「アイルランド」移民、諸民族の春の失敗による「ドイツ」移民。

1860年ごろの「中国」からの苦力クーリと呼ばれる移民、ハワイへの集団移民をした「日本」移民など。

更に1880年代にはイタリア移民の急増。ロシアで迫害された「ユダヤ人」の移民も。

様々な移民たちの労働力に支えられ、アメリカ合衆国は成立したのだ。

第9話「伊・独・統・一」

1848年、諸民族の春と呼ばれた時代。

「フランス二月革命」、「ベルリン三月革命」、「ウィーン三月革命」、更にプラハの「チェック人」、ブダペストの「ハンガリー人」、ワルシャワの「ポーランド人」。

「ローマ」、「サルディニア王国」でも革命運動が起きていた。

しかし、そのほとんどは革命に失敗。

その後のヨーロッパの課題とは、「民族的な統一国家を建設」することであった。

19世紀前半―政治的自由・経済的自由を求める「自由主義」・「国民主義運動」。

カルボナリの乱は失敗し、政治結社「青年イタリア」が「マッツィーニ」によって創設され、活動を開始する。

「共和主義」によるイタリア統一国家建設を目指した「青年イタリア」は、諸民族の春の翌年1849年に「ローマ共和国」を樹立。しかし、それを統一を脅威に感じたフランスの干渉によりあえなく挫折した。

さらには分裂状態のイタリア内にある「サルディニア王国」は「オーストリア」宣戦するも敗北。

圧倒的な戦力差を感じたサルディニアは、近代化の必要性を痛感する。

―サルディニア王国―

「我は国王、“ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世”である！記憶したか？」

長い。

1852年、首相に任命された「カヴール」は、「立憲君主政」に基づく国家統一を主張。

近代化の促進で「世界資本主義」の中での成長を望む資本家層・市民層の両方からの支持を獲得。

更に巧な外交手腕で、フランスの「ナポレオン3世」との密約に成功。

これを「プロンビエールの密約」と呼ぶ。これにより、フランスは対オーストリアのサルディニアに協力。代わりにフランスは「サヴォイア」と「ニース」を割譲してもらう、といった密約だった。

「これで勝ち・・・！」

「1859年」、「イタリア統一戦争」。

遂にサルディニアはオーストリアと再戦。しかし・・・。

「サルディニアなど・・・切れば良い・・・！」

なんとフランスはオーストリアと単独講和し、戦線を離脱。

なんとかサルディニアは勝利したものの、「ロンバルディア」しか得ることは出来なかった。

「馬鹿か・・・！こんな当たり前のことに、土壇場でしか気付けないなんて・・・！自分を救うのは・・・自分だけ・・・！」

外国の協力は期待できないと痛感したサルディニアは、密約を守り「サヴォイア」「ニース」をフランスへ割譲。

代わりに「中部イタリア」の併合を認めてもらい、この件はひとまず落ち着いた。

そしてここから、サルディニアのイタリア統一が本格的に動き出す。

「NEVER、散開！」

と、何処ぞの傭兵軍団だお前は！というツツコミはさておき、1860年、青年イタリアの党員で「共和主義者」の「ガリバルディ」は「赤シャツ隊（千人隊）」を結成。

「シチリア島」へ上陸する。この頃、シチリア島のある「ナポリ王国」では「ブルボン家」の残虐な圧政に対し、住民の反乱が起こっていた。

ガリバルディはこの反乱軍と合流し、見事ナポリ王国を占領。勢いづいたガリバルディはその後、「ローマ教皇領」の併合を目指し北上。しかし……。

ガブール「国王！ローマはフランス軍が防衛しております。下手に手を出せば、戦争が……！」

国王「私自ら出て、ガリバルディを説得しよう。」

ーナポリ北方にてー

ヴィットーリオ（ry）「ローマを攻撃してはダメじゃ。国民が犠牲になってはならぬ。」

ガリバルディ「全てはイタリア国王・・・貴方の仰せのままに。」

そして、ガリバルディは国王に占領した「ナポリ」など南イタリアを「献上」。

これにより、サルディニア王国はイタリアのほぼ全土を併合した。

「1861年」、「イタリア王国」の成立宣言。

初代イタリア国王はもちろん「ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世」である。長い。

初代宰相も予想通りの「ガヴール」（まもなく急逝）。

最初の首都は「トリノ」で、後に「フィレンツェ」、その後「ローマ」である。

更に1866年、普墺戦争の隙を突き、オーストリアから「ヴェネツィア」を奪回。イイネ！

また4年後の1870年、今度は普仏戦争の隙を突き、フランス防衛軍のいない間に「ローマ教皇領」を併合。（ヴァチカン除く）

こうしてイタリアは統一を成し遂げたのだ。しかし、残された問題もあった。

「未回収のイタリア」。つまりイタリア人が住んでいるのに、オーストリアに支配されたままの地域、「南チロル」「トリエステ」などだ。多分、チロルチョコとは関係ない。いやあるのか？知らん。これが「第一次世界大戦」のきっかけになったりする。

また、「南北の格差」。北イタリアでは資本主義的な経済発展が進

むも、南イタリアでは「貴族大地主」の支配が続き、土地を持たない貧しい農民層が残存してしまったのである。

※イタリア統一の三英傑

- ・マッツイーニ（すまん正直忘れてた）
- ・カヴール（空気クラスタ）
- ・ガリバルディ（↑だけで良くね？）

ードイツ帝国の成立ー

「プロイセン王国」の発展ー

1834年、「ドイツ関税同盟」が結成。これによりドイツは経済力で優位に立つ。

その後、1848年の「ベルリン三月革命」の影響で「フランクフルト国民議会」が開かれ、ドイツ統一問題が話し合われるようになった。

その中で、「プロイセン中心」のドイツ統一を考える「小ドイツ主義」と、「オーストリア中心」のドイツ統一を考える「大ドイツ主義」が対立。

オーストリアを嫌っていたことから、小ドイツ主義が勝利するが、プロイセン君主と自由主義者の対立から、統一は実現しなかった。

そして、時代選ばれしハゲ野郎が現れるー！

「1862年」、「ビスマルク」が「プロイセン宰相」に就任。1862～1871年まではプロイセン宰相、1871年～90年までは「ドイツ帝国宰相」である↑軽いネタバレw

この1862年は、日本では生麦事件や文久の改革があったらしい
(遠目)

ビスマルクは「地主貴族」^{ユンカー}の出身で、保守派の君主主義者だ。

「外交のプロ」「プロイセンのハゲ」「ヴォルデモート似」と言われていた。嘘だ。

軍事力によるドイツ統一を目指した彼は、「鉄血演説」により「軍備拡張」を実行。「鉄血宰相」との異名を持つハゲになった。

こうして、ビスマルクはドイツ統一へのルートを見極め始める―。

1864年「デンマーク戦争」。オーストリアと組んだプロイセンは、デンマークを破り「シュレスヴィヒ・ホルシュタイン」を獲得。

更に1866年「プロイセン・オーストリア戦争(普墺戦争)」。

7週間戦争とも呼ばれる。

この戦争で、ビスマルクはオーストリアを必ず倒せるという絶対的自信があった。

それは2年前の「デンマーク戦争」も根拠の一つ。この時、何故ビスマルクはデンマークなどという弱い国と争ったのか? わざわざオーストリアと手を組んでまで。

その真の目的、それはオーストリアの戦力を見極める事だった。

その結論は……。

「私にもツキがあったな……オーストリアは大したことはないっ・
……!」

だがもう一つの危険性、オーストリアと他国が手を組むこと。その可能性を払拭しなくては、安易に戦線出来ない。

まず「イタリア」。大丈夫だ、問題ない。イタリアは領土問題でオーストリアを疎ましく思っている。助けるはずがない。

次に「ロシア」。あんな大国と手を組まれたら・・・！だが、そこが貴様のツキのなさ。「クリミア戦争」のお陰で、ロシアもオーストリアを疎ましく思っている。クリアだ。最後に「フランス」。こいつだけは可能性を拭いされない。仕方ない・・・領土をやる。だから中立の立場でいろ。

こうした計算の果てに始まった普墺戦争で、僅か50日でオーストリアは降伏。

鉄道網を利用した電撃戦が効いた。

「エ・レ・キ・ON」

こうして負けたオーストリアはドイツ連邦から排除され、北ドイツ連邦へと変わって行く。

更に1870年～71年、「プロイセン・フランス戦争（普仏戦争）」でビスマルクは「ナポレオン3世」を撃破し、「パリ・ヴェルサイユ」を占領。

この1871年、ヴェルサイユ宮殿「鏡の間」にて、「ドイツ帝国」が成立した。

これによりドイツはフランスから「アルザス・ロレーヌ」地方を奪う。

ードイツ帝国成立ー

1871年4月「ドイツ帝国憲法」制定。

「外見的立憲主義」が特色とされ、25連邦（うち22は君主国、

3は自由市）から成る連邦制の立憲君主国だ。

初代ドイツ皇帝は、流れてプロイセン国王が兼任。

Eカードでいう「皇帝」には、「ヴィルヘルム1世」が。

初代ドイツ帝国宰相はもちろんビスマルク。

ドイツ帝国は「連邦参議院」と「帝国議会」の「二院制」から成っていたが、「帝国議会」はほぼ無力。立法権すら持たなかった。

「帝国議会」は「男性普通選挙」で選ばれた議員から構成されたが、「内閣制」がなく、結局実権は皇帝・宰相に集中していた。

これが「外見的立憲主義」であったのだ。

ドイツは1870年代、重化学工業で「世界一」に躍進。

これにはフランスから奪った資源地帯「アルザス・ロレーヌ」や、賠償金獲得が関係していた。

ビスマルクの強力な支持基盤となる「産業資本家」層。

反対に最大の抵抗勢力となる「社会主義者」。

これがビスマルクの「文化闘争」に大きく関わって来る。

南ドイツ連邦の「カトリック」教徒やポーランド系住民などが、「プロイセン（プロテスタント）」主導の政策に反抗した為、ビスマルクは学校の国家管理などで「国民意識」を形成させ、カトリック勢力を抑圧した。

ところが、議会に「社会主義」勢力が進出すると・・・。

「労働者の扱いが酷過ぎるだろ常考。」

「公平な分配」を求める社会主義者達を疎ましく思ったビスマルクはカトリックに妥協。

社会主義の抑圧に協力を求めた。

ビスマルクの「アメとムチ」の政策。

ムチ.. 1878年の皇帝狙撃事件を口実に、「社会主義者鎮圧法」制定。社会主義的な集会などを禁止した。

アメ.. 「社会保険制度」の実施。これは「世界初」の「公的社会保険制度」で、労働者の待遇は改善された。

その頃・・・。

1866年の普墺戦争で敗北し、ドイツ統一から除かれた「オーストリア」は、「オーストリア・ハンガリー帝国」を成立させる。この広大な領域支配と、複合民族国家を維持する為、ハンガリー人にのみ自治権を、チェコ人・ポーランド人には選挙権を与えた。

だが、「ポーランド人」は国をロシア・プロイセン・オーストリアの三国によって分割占領され、国を失ってしまった。
第一次世界大戦後に復活するその日まで。

第10話「ロシアの南下政策」

伊・独の統一が進む中、大国ロシアは・・・。

「オスマン帝国」オスマン・トルコが1299年に「スレイマン1世」によって建国。超大国ゆえに、複雑な民族構成のこのオスマン帝国は19世紀以降弱体化。

あのバルタン星人の名前の由来となったヨーロッパの火薬庫「バルカン半島」において諸民族の独立運動が活発になったのだ。

特に「スラヴ系」「キリスト教徒」「ギリシア正教徒」の運動が激しかったと言う。

オスマン帝国の弱体化に乗じた諸民族の「独立運動」と、その動きを利用した「ヨーロッパ諸国の干渉」によって生じた国際問題を「東方問題」という。

東方Projectが真っ先に思い浮かんだ貴方、もう手遅れです。

—各国の干渉の理由—

ロシア↓地中海への出口獲得を目指し、「南下政策」を推進

イギリス↓インドへの航路の安全確保のため、地中海東岸への進出
オーストリア↓バルカン半島の独立運動の影響を自国の領土が受けることの防止

そして「1853～56年」、「クリミア戦争」、開幕。

オスマン帝国^{トルコ}内にある聖地エルサレム管理権問題が直接の原因である。

ロシアはギリシア正教徒が迫害を受けていると主張し、管理権を要求。

これにより、「ロシア」はトルコに宣戦する。

ロシアの南下を恐れたイギリス（ヴィクトリア女王）とフランス（ナポレオン3世）はトルコを支援。

英仏の歡心を得る為、「サルディニア」もトルコを支援した。

「何としてもロシアを止める・・・！総員、総攻撃！難攻不落のこの砦、打ち破る！」

最大の激戦地「セヴァストポリ要塞」の攻防戦。

トルコ、イギリス、フランス、サルディニアの、「セヴァストポリ要塞」攻略！

ロシア「クギの森の道幅を毎日広げて、大群を通れるようにしてしまったのは・・・俺！？」

「ブロックが・・・砦の番人、ブロックがガバガバ・・・！」

「や、奴は傾けて来たッ・・・この要塞全体を！」

そして・・・。

「どうした？随分と苦しそうじゃねえか・・・！この悪魔！ド悪魔めっ！そんなに出したきゃ・・・吐き出せー！お前が・・・食

ってきた……兵士たちの……魂……希望、絶望、命……
その全てを……吐き出せ……！」

セヴァストポリ要塞、落ちる。ロシア軍、1050年地下行き。

大敗したロシアは1856年「パリ条約」で「黒海の中立化」を約束し、「ボスフォラス海峡」と「ダーダネルス海峡」の外国軍艦の航行禁止が決定された。

こうして、ロシアの南下政策は阻止されたのだ。しかし、これほどの国々に阻止されるとは、やはりロシアは脅威なのだろう。Twitterで嫁が奪われることを恐れ阻止しまくっている君達みたい。ちなみに僕の阻止の速さは新幹線並みですよ。

クリミア戦争に負けたロシアは、後進性を痛感。

「アレクサンドル2世」による改革が始まる。ちなみにロシア皇帝の覚え方は「アレ・ニコ・アレ・アレ・ニコ」である。

「1861年」、「農奴解放令」。しかし、土地を得るには金がかかり、借りた土地の支払いの為に農民の多くは「窮乏化」。

「ミール（農村共同体）」という、江戸時代の五人組のような「連帯責任」制もあり、結果農民は土地を離れて「工場労働者」になる者が多かった。

1870年代には「ナロードニキ運動」が展開。都市の知識人階級「インテリゲンツィア」を中心に、農民を「啓蒙」させる活動が始まった。

合言葉は「オカカケヨウネー」じゃねえよ、「ヴ・ナロード（人

民の中へ」だよ。おかかかけてどうすんだよ。

しかし、農民には平等などの精神が理解できず、「無関心」。更に国に厳しい弾圧を受け、運動は挫折した。

「何故だ・・・何故これがわからん・・・！結局頭では何も変わらない・・・力こそが全てと言うことか・・・！」

絶望した彼らは「テロリズム」へと走る。これにより1881年にアレクサンドル2世は暗殺された。

この頃、バルカン半島では・・・。

1860年ごろから「パン・スラヴ主義」（スラヴ系民族の独立と国家建設を目指す動き）が始まる。

ロシアは全スラヴ人の指導者を自称し、オスマン帝国と激突。

1877～78年「ロシア・トルコ戦争（露土戦争）」が開幕。この発端はオスマン帝国領内の「ボスニア」「ヘルツェゴヴィナ」で独立運動を起こしたスラヴ系ギリシア正教徒が虐殺されたことだった。

ロシアは「イスタンプル」まで進撃し大勝。

1878年に「サン・ステファノ」条約が結ばれ、遂にロシアはエーゲ海域までの進出を実現！と思いきや・・・。

イギリス「ちょ、お前は南下しちゃアカンアカンアカンアカン。ン。」

オーストリア「待て、話せば分かる、多分。」

イギリスとオーストリアはやはり激しくロシアは抗議。そうは見えないのはご愛嬌。

戦争が起りかねない状況になってしまう。

ここで国際戦争が起ると困るドイツは、宰相のビスマルクは自らを「誠実な仲買人」と称し、「1878年」の「ベルリン会議」で双方を仲介した。

これは、ドイツがロシア・オーストリアと「三帝同盟」を結成しており、丁度仲介する立場にあったからだ。

この時のイギリス首相は「ディズレーリ」。

そして「ベルリン条約」が締結される。その内容は、ロシアをかなり抑制するものだった。

1. 「サン・ステファノ条約破棄」。

2. バルカン半島の「ルーマニア（ラテン系）」「セルビア」「モンテネグロ」の独立の承認。

3. 「ブルガリア」はオスマン帝国領内に留まること。

4. ロシアと同じスラヴ系の「ボスニア」「ヘルツェゴヴィナ」は、オスマン帝国領内に留まるが、「オーストリア」が管理する。

5. オスマン帝国の「キプロス島」をイギリスが獲得する。

6. ロシアは「ベッサラビア」を得たのみ。

こうして、ロシアの南下政策はまたも阻止されたのだった。

戦争を辛くも回避したヨーロッパは、「ビスマルク外交」による「勢力均衡策」が進められた。

バルカン半島では、パン・スラヴ主義の動きがますます勢いづき、後に第一次世界大戦の始まりとなる「サラエボ事件」が「1914年」に起きるのだった。

第11話「新たなる帝国を」

「国民国家」の形成。

イタリアやドイツは統一国家に、更には「日本」も近代国家へと踏み出した1870年前後の世界。

各国は「国民統合」の為に、「初等教育」の普及や「言語」の統一を行った。

その結果、著しい「ナショナリズム」の高揚と、「エスノセントリズム自民族中心主義」による排外的傾向が生まれる。

これにより生まれた愛国心の所為で、「植民地獲得」競争や「軍拡」競争が激化し、第一次世界大戦へと時代は向かって行く。

また、エスノセントリズムにより、少数民族、特に「ユダヤ人」は迫害され、遂に「ドレフュス事件」（1894～1906年）が起きてしまう。

これはフランス軍のドレフュス大尉がユダヤ人という理由だけでスパイとされてしまった事件である。

背景には、普仏戦争でドイツに敗れたフランスの経済的ダメージと、ドイツ憎し！ドイツへの復讐を！と鼓舞するフランス軍部によって煽られたナショナリズムがあった。

「はWWW冤罪とかWWWフランス軍マジキチWWW」

と、文豪の「ゾラ」が軍部を弾劾したことを機に、国民の世論が二つに分かれる大問題へと発展した。

「フランス軍とかWWWマジWWW」

「軍を馬鹿にするな、自国の軍だぞ常考」

結果、ドレフユスの無罪が判明し、軍部の威信はオワコン。
一方、ユダヤ人達は……。

「もう俺らだけで国家建設したろーぜwww」

と、自らの国家建設を求める「シオニズム運動」が始まる。
このシオニズム運動は、「パレスチナ」に「ユダヤ人」国家を建設しようとする運動である。

その中心都市は「エルサレム」。

「よっしゃー、ユダヤ人全員集合！」

シオニズム運動を始めたのは「ヘルツル」。シオニズムの「シオン」とは「エルサレム」のことである。キングダムハーツじゃないよ。

また「ロスチャイルド家」は兵藤会長並みに金持ちで、イギリスやフランス政府にもエルサレムを取り戻す為の資金援助を惜しまなかったりと、世界の金融を左右した。

スエズ運河買収の為の資金をイギリスに貸したりもしていたという。

こうしてユダヤ人が盛り上がる中、ロシアではなんと大規模なユダヤ人排撃「ポグロム」が起こる。

これにより、ユダヤ人は迫害され、アメリカ合衆国への移民やシオニズム運動の高まりに繋がったと言う。

ーイギリスー

1870年代―「大不況」

「どうせ俺なんか・・・。」

「アメリカ・ドイツ」の工業化の前にパーフェクトハーモニー、すなわち「世界の工場」（えっw）の地位を失ったイギリスはやさぐれた。

そして「世界の銀行」へと転換。「俺達にも掴める光がある・・・。」とかワケのわからんことを呟いて世界の銀行になったのだから、実は凄い国なのかもしれない。

この大不況により、様々な社会主義団体が結束。「ウェッブ夫妻」らが「フェビアン協会」を結成し、1900年には「労働者代表委員会」が開かれ、その後1906年には「労働党」が結成された。この労働党の特色は、これまでの「マルクス主義（階級闘争の理論）」に対し、「議会制民主主義」を基に社会をより良くして行こうというものだった。

この労働党の最高権力者は書記長。「初代書記長」には「マクドナルド」が就任した。

I'm love in it. ってバカ。一切関係ないわ。

また1911年には「国民保険法」が制定され、「失業」「年金」など労働者の生活改善が目指された。

ところで、国はどうなっているのかというと・・・。

1875年、ロスチャイルドの資金援助もあり、保守党（トリー党）デイズレーリ内閣は「スエズ運河株」を買収。これを機に、イギリスは帝国拡大を目指して行く。

まずはスエズ運河を伝い、「エジプト」へ内政干渉。もちろんエジプトが黙っているわけもなく、1881〜82年に「ウラービー」が反英運動を起こし、「エジプト人のエジプト」を訴えた。これがエジプト初の民族運動だったという。

「ねじ伏せろ、全てを。」

イギリスはこれに対し軍隊で対抗、鎮圧。エジプトを事実上の「保護領」とする。

そのままナイル川をさかのぼり、「スーダン」へ南下。1881年から「マフディー（救世主）」を名乗るイスラム教徒の反乱を受け、イギリスの「チャイニーズ・ゴードン」将軍が戦死。

これによりイギリス世論はブチギレ、10年がかりでスーダンを占領した。

更にイギリスはアフリカ大陸を南下、1898年に「ファシヨダ事件」が起こる。

イギリスがアフリカ大陸を「縦断」していたのに対し、フランスは「横断」。

スーダンの「ファシヨダ村」で両軍が衝突し、戦争になり兼ねない状況に。

しかし、ここはフランスが空気を読んで譲歩し解決した。フランス君KYじゃなかった。古いか。

南部では「ケープ植民地」にイギリス人が多数入植。

ここは1815年以前は「オランダ領」だった。このオランダ人の子孫「ボーア人」はイギリス支配を避けて北方に「トランスヴァール共和国」と「オレンジ自由国」を建国。

ここでは莫大な「ダイヤモンド鉱」や「金鉱」が発見された。何この勝ち組。

「私は“アフリカのナポレオン”の異名を持つ、最強の帝国主義者だ！」

この厨二臭い変態は「セシル・ローズ」。ケープ植民地の首相で、
どんどん植民地を増やそうとした。
どんどん鉄道や通信網を敷設したという。

そして、「南アフリカ戦争」（別名…ボーマ戦争）開幕。

「1899～1902」の3年間行われた。

イギリス政府はボーマ人の国家がイギリス人移民を迫害していると
の理由で宣戦布告。

ケープ植民地にボーマ人国家を併合し、「1910年」に「南アフリカ連邦」（現・共和国）を建国した。

そして、イギリスは南アフリカの「ケープタウン」、エジプトの「カイロ」、インドの「カルカッタ」を結ぶ三角地帯を鉄道・通信網で支配し、勢力下におさめようとする帝国主義対策、「光のピラミッド」！じゃなくて「3C政策」を推進したのだった。

—フランス—

普仏戦争での敗北から、フランスは国民感情として「ドイツへの憎悪」が増大していた。

そしてフランスのナショナリズムは海外への「投資」を通じて帝国
拡大政策へと向かう。

しかし、一方では外国ではなく自国に目を向けることを望む動きも。

1905年「統一社会党」結成。

これが、国際的な反戦運動の中心組織となるのだ。

さて、イギリスのアフリカ縦断に対し、フランスは横断をしていた。1830年「アルジェリア出兵」以後、アルジェリアはフランスの直轄支配を受けていた。

更にフランスは1881年「チュニジア」を保護国化。さらに南下して広大な西アフリカを領有すると、今度はアフリカ東部に1888年「ジブチ港」を建設。1896年には「マダガスカル」を領有し、西から東へアフリカ大陸を横断して行ったのだ。

そして、1898年「ファショダ事件」。この時、何故フランスは空気を讀んだのか？

それはドレフュス事件の所為で、国内の世論が2つに分かれ、政治論争の真っ最中だったからだ。

とても戦争が出来る状況ではなかった。

しかし、ここで空気を讀んだことにより、次第に両国は歩み寄る。

「1904年」、「英仏協商」成立。

フランス「イギリスさんイギリスさん、エジプトへの優越権をどうぞどうぞ。」

イギリス「いやー、貰ってはかりじゃ悪いですよー。フランスさんもモロッコへの優越権をどうぞどうぞ。」

なんともまあ和やかな雰囲気である。これにより、イギリスは「エジプト」に、フランスは「モロッコ」に優越権を持つことを互いに認め合う。

彼らがこう仲良くしている理由は一つ。「ドイツ」に対抗する事だ

ったー。

ードイツー

「1890年」、「ビスマルク引退」。

ドイツ皇帝「ヴィルヘルム2世」は社会主義者弾圧を取りやめようとしたが、彼らの危険性を未だに感じていたビスマルクはそれに反対。解雇されたのだ。

こうして、ヴィルヘルム2世の親政が始まった。

「私は天才皇帝なのだ！フーハツハツハツハツハツハ！」

無能なワルズ・ギルミみたいなヴィルヘルム2世は、「世界政策」を進め、「大艦隊」を建造。イギリスと競争になり対立。

更にオスマン帝国に進出し、「バグダード鉄道」の敷設権を獲得。これはオスマン帝国を南下政策の足がかりにしていたロシアとの対立を生む。

このイギリスやロシアとの対立はビスマルクが最も恐れていたことであつた。

つまり、ドイツは踏み出してしまったのだ。戦いの中へ足を。

バグダード鉄道の敷設権獲得により、ドイツは「バグダード」「ベルリン」「ビザンティウム（デンドロビウムでない）」を結ぶ「3B政策」を展開。パクリも良いとこだ。

そして、ビスマルクの引退と共に「社会主義者鎮圧法」は廃止とな

り、1890年には「社会民主党」が成立。

彼らは「ベルンシュタイン」の理論を採用。これはマルクス主義を修正して、議会を通して国民の意思を尊重しながら社会改良を実現しようとする考え方で、これを「修正主義」と呼ぶ。ダサいな。

この修正主義は、以後のヨーロッパの社会主義運動の中心となるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5372u/>

世界史A

2011年11月20日20時44分発行